

上海大学短期留学引率記

● 土 屋 博 映

横田先生の中国留学に伴い、上海大学の引率者として、前半が私土屋、後半が横山先生、の二人が選ばれた。中国語があまり（というより相当）得意でない私だが、選ばれたからには、全力を尽くすしかない。センター長の池上先生に中国語会話のCDをいただき、暇を見つけては、中国語に慣れ親しむようにしたが、年齢とは悲しいもので、若い時のような記憶力がない。何とか基礎の基礎程度を身につけ、8月5日（日）、学生16名を連れて、成田に集合。数時間の飛行で、上海の空港に無事到着した。

上海には日本語の話せる学生がいるとのことだったが、待っていた学生の日本語の実力は、かなり低い。やりとりがスムーズにいか

ないことに多少とまどい。蒸し暑く、バスの乗り場までは長時間かかった。水は機内持ち込み禁止なので、だれもボトルを持たず、大学までさらに1時間あまりを、バスの中で水なしで過ごした。また大学について、入寮するチェックインに一人10分ほどかかった。単純計算で16名なら2時間以上はかかるわけで、疲労している私と学生には拷問に近い。さらにチェックインしたあと、休む間もなく、上海大学構内の案内が開始された。空はにわかにかきくもり、雨が降り出してきた。大学のはずれの繁華街に至ると大雨。ここで、案内を中止してもらおう。ろくな雨具もない学生たちを雨の中、案内を強行するほうがおかしい。しかし、案内学生は強行にこだわった。

まあ、彼らには夕食をご馳走したのだが、「臨機応変」というのはどこの国の言葉だっけと言いたくなった。注文を受けたウエイトレスのミスで、頼んだ夕食のチャーハンがなかなか出てこない。やっと出てくると、その量がやたら多い。案内学生は中国語で話すので、会話もできないので、大量のチャーハンを黙々と食べるしかなかった。いざ精算となったときに、すぐに支払おうとする僕に、学生たちは制止し、計算書を見直し、文句をつけている。なんと40元も高く請求されていたのだ。この国は、そういうことがよくあるんだろうなあ、とおよその見当はついた。

その夜、寮（私は別棟のホテル形式の宿舎）に帰った皆、生きかえった心地がしたことと思う。私もずぶぬれで、やっとのことで部屋にたどりついた。キーもおよそ変なキーで、学生が部屋まで来てくれなかったら、多分私は部屋の外で立ち尽くすだけだったろう。

さて、寮は一人一部屋で、シャワーつき。寮の一回にはフロント

と小さな売店があり、水やインスタント食品などは朝9時ころから夜11時までいつも容易に手に入るのでよかった。私の宿舎は、ツインで広く、ゆったりして空間的には快適であった。ただし、シャワーの出が悪く、お風呂で汗を流すのは大変。また温度調節も非常にしにくい。部屋に限らず、形は整っているのだが、細部までのきめこまやかさに欠けるといなのが、上海の印象であった。北京オリンピックも大変だろうなあとい思わずにはいられなかった。

ここから学生にとっては20日あまりの、私にとっては11日間の上海大学での生活が始まったのである。

朝食や昼食はとくに行事がない限り、セブンイレブン（しっかりあるんですね、台湾にもありました）のおにぎりなどが中心。このおにぎりが曲者で、ウメボシとかおかかとかしゃげなどという軽いおにぎりはまずない。ごてごてした肉を巻いたものなど、日本では考えられないおにぎりである。夕食はホテルのレストランや近く

の繁華街のファミレス系統のレストランでとることが多かった。中華料理についてはいわゆる日本で食べるものとは、かなり異なると考えられる。結論を言うと、上海の食べ物は、私の口にはあわない。ケンタッキーのチキンはすべて手羽先風で、すべて甘辛煮であり、日本のものとは相当異なる。私はももが食べたかった。

大学の近くで、日本語で「ラーメン」と書いてある店を見かけ、入った。牛肉ラーメンと焼き餃子と青島ビール（大瓶）を夕食に頼んだ。牛肉ラーメンはおいしかったが、量は特大。焼き餃子とは珍しい（日本風）が、これも山盛り（皮が厚く固く、もごもご食べた）。さらにビールを飲んで、値段がたったの20元（300円）とはびっくり。ちなみに最終日にお別れ会として、横山先生と江先生（後述）との3人で、高級中華料理店（らしい）に入った時のこと、しこたま食べ飲み、料金は3人で200元（3000円）ほどであった。この物価の安さが上海（中国）の、実感できる特徴の一つである。ちな

みに10日いても私の財布の中身はほとんど元のままといった状態だった。

学生は、午前中はみっちり3時間、中国語の授業。授業に迎えに来てくれた若い女性をてっきり女子大生と思いこんだ私。しかし彼女こそ、中国語の楊先生であった。私も前半5日間だけ参加したが、ついて行くのが精一杯。楊先生は実に緻密な授業を展開する。板書の丁寧さなど見習うべきところが多かった。午後は日替わりメニューのように、毎日各種イベント、中国の歌、中国映画、中国茶、太極拳、などを行ったが、中国茶についてはかなり興味がひかれた。日本の茶道とは、お茶を素材にしながら、全く異なるところが異文化というものだと感じた。

寮から校舎まではキャンパスを横切り、5分ほど。毎日が暑く、私も学生たちも少しずつ、体力を消耗していくのであった。ただ、日本に帰国した翌日は、最高気温の日本記録が出た日で、とくに上海が暑いと不平をいうわけにはいかない。順応性は学生の方が数段

勝り、学食の3元(45円)くらいの食事で儉約していたようだ。私の方は、後半ばてて、下痢をし、食事も満足に取れない状態になった。横田先生の置き土産の言葉「上海に行き、1週間で皆下痢をする」というのは本当だった。何とか持ちこたえて、横山先生にバトンタッチをした日は本当にほっとした。まさに仏の横山だった。

中国の特徴を実感できたことは、物価の安さの他に、交通事情の悪いことがあげられる。急速に車が増えたことと、マナーが伴っていないことで、大変である。一言で言うと、私は上海(中国)では車は運転する気はないし、できない。とにかくクラクションはそこら中で大合唱。右へ左へ割り込み、猛スピード、そんな車の中、道路を横断するのにも勇気がある。上海大学の正門前のセブンイレブンに渡るのに、一大決心があるのである。こちらでは、人間が車をとめて横断したりする。おそらくリヤカーや自転車が万能であったころの、そのままの感覚で歩行者は横断しているのに違いな

い。

ところで、上海大学でもっとも日本語がうまかったのは、留学生担当の江(こう)先生であった。面倒見もよく、本当にお世話になった。何よりも、こちらの要求等、嫌な顔を見せないし、笑顔を絶やさないと、人柄のよさをしのばせる。江先生がいたから、ストレスがたまらずに学生の世話をすることが出来たと言っても過言ではない。先生が3日ほど、休暇をとった時には、学生たちに「絶対に江先生が出勤するまで、病気にならないように、事故をおこさないように」と強く訴えたものだ。

前述のように、横山先生が到着した夜、三人で引き継ぎ(お別れ)会を開いた。こちらは少々体調不良だったが、美味しく老酒をいただいた。江先生に感謝の気持ちを表しつつ。

翌日、横山先生と江先生に見送られて、上海大学を後にした。横山先生と学生たちの無事を祈りつつ、帰国の途についた。こうして、私の上海随行の全日程は終了した。

※上海での10か条 ①物価が安い
②交通事情が悪い ③英語が通じない
④男性は上半身裸が多い ⑤自動車も多いがリヤカーも多い ⑥中

国語はやる気になれば英語よりも容易 ⑦食事は合わない ⑧公衆トイレは汚い ⑨反日感情はない ⑩時間にルーズ